土仏観世音堂（どぶつかんのうどう）

●概略

大興寺境内にある土仏観世音堂は、花巻市石鳥谷大興寺にあり、東北自動車道、花巻インターと紫波インターの間、黒森山麓東縁部に北上川の支流葛丸川（大瀬川）と耳取川が流れその南側に位置する、地名の大興寺は中世の頃には、葛岡村と称した、また江戸期には盛岡藩八幡寺林通に属し、明治二十二年迄は長谷堂村・松林寺村・大興寺村の三村であった。その後、稗貫郡石鳥谷町、平成十人年より花巻市に属しています。

観音世堂は大興寺の門外の高台に南面して建ち、大きな鞘堂が造られて保護されていますが、過去にも何回か建て替えが行われたことが知られています。

大興寺の場所は、中世には葛岡の本山修験長谷寺があり、近くには浮田氏の居城である長谷堂館がありました。承元年間（一二〇七～一一）に和賀二子城の支城として築かれ、天正十人年（一五九〇）、稗貫・和賀氏が亡びる迄、和賀氏の後裔浮田氏が領主でした。地形を見ると現在も、長谷寺境内の米斗利澤神社の東側に接して幅四～六ｍの空堀と土塁とが残っており北西側には二重の堀などの遺構が認められます。

土仏観世音堂には大興寺の開創である永徳元年（一三八一）、に梅山聞本禅師が災難や疫病の災厄に遭いながらも、その仏像の加護で身を守ることができたと伝えられる土仏像が土佛観音として安置されています。（詳くしは「萬畳山　大興寺ー歴史と背景ー　「大岳好正　著」に書かれている。）

土仏観世音堂は勘次郎初代が五十四歳、二代目が二十八歳の時の合作思われます。二間四面の総けやき素木細工で向拝の四万・正面唐戸・四方の欄間・渡欄間に彫刻を施している、なかでも昇降の「双つ龍」「立て牛・臥せ牛」は秀作であり、七カ年の歳月を費やしたといわれております。

［昭和五十四年六月　花巻市有形文化財建造物指定］

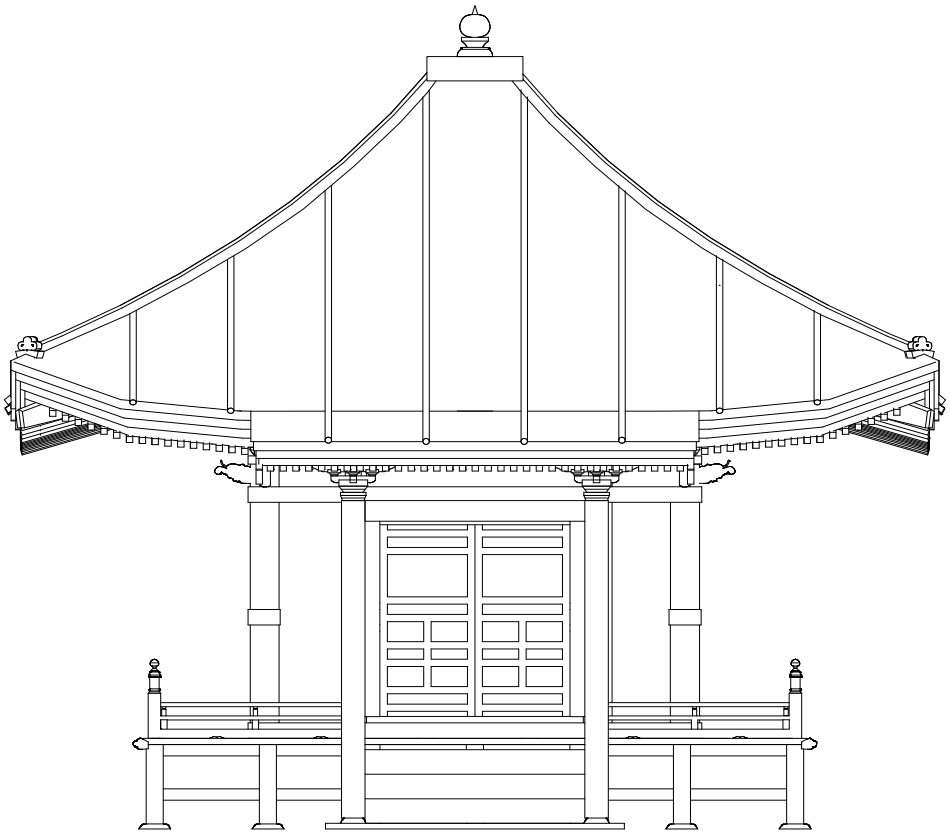
●棟札

現存の観音世堂は弘化三年（一八四六）に南部の名工として知られた高橋勘次郎親子が七年の歳月をかけ建造されたものですが、残された土仏観世音堂の棟札には

五穀成就　弘化三丙牛年（一八四六）、
大工棟梁高橋勘治郎
奉再建土佛観世音菩薩當当山廿六世徳宗代敬白
諸顧成就　三月吉祥日　大小檀那十方施主等

と書かれており寺伝よれば、彫刻を施した堂舎の建立は六世徳宗の代であり天保三年（一八三二）三月となっており、弘化の年代の住持は二十七世実参の代であることや、勘次郎が勘治郎になっていることから棟札は何らに理由により後代に作られたものと思われます。

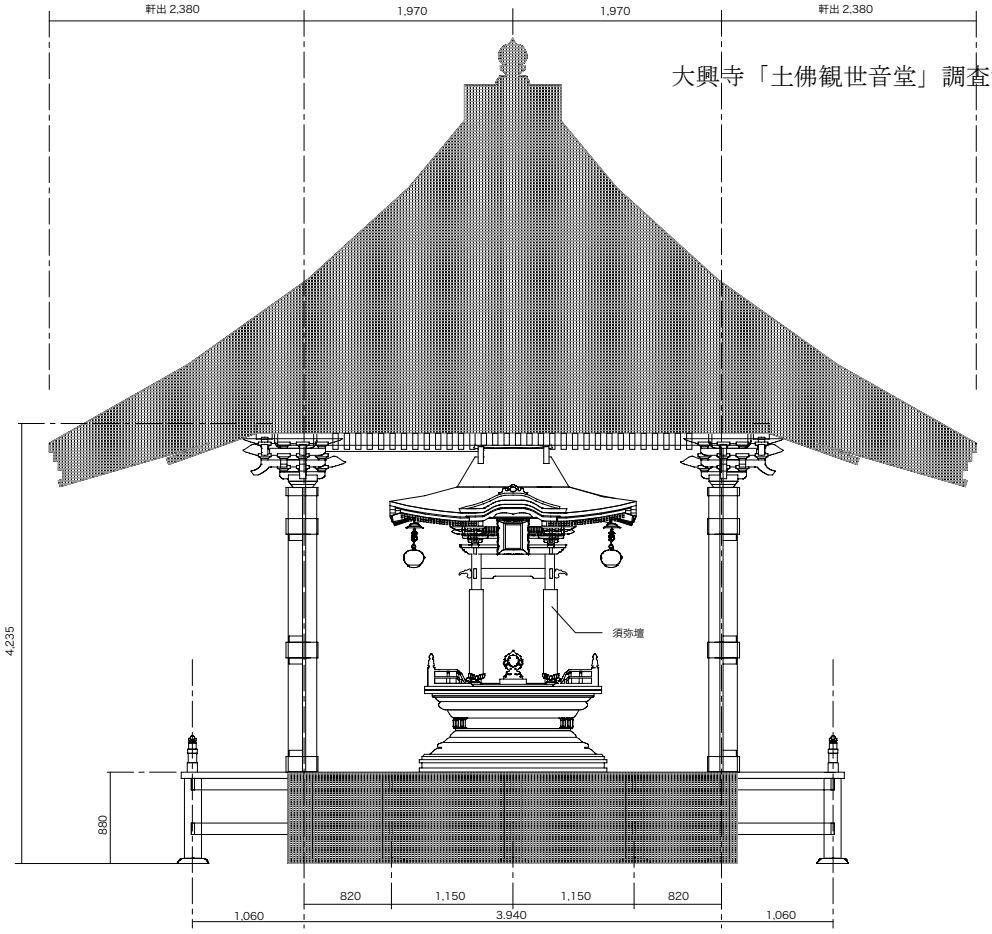
南側立面図(側面)　縮尺500/1



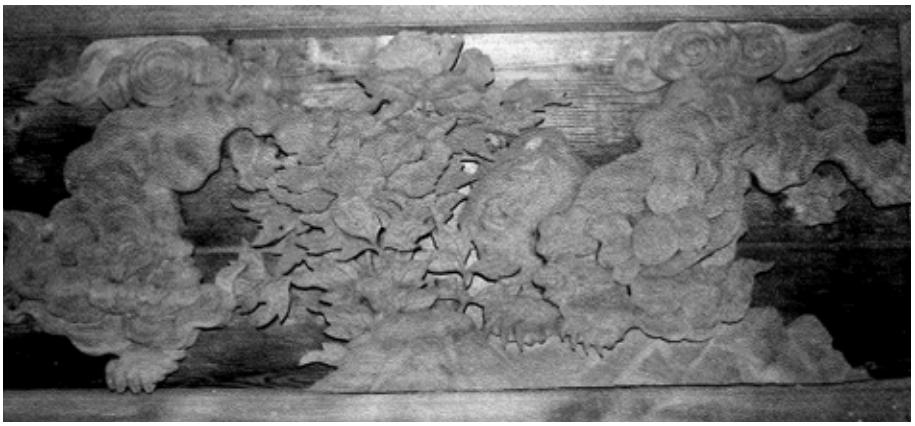
断面図(1)

縮尺500/1

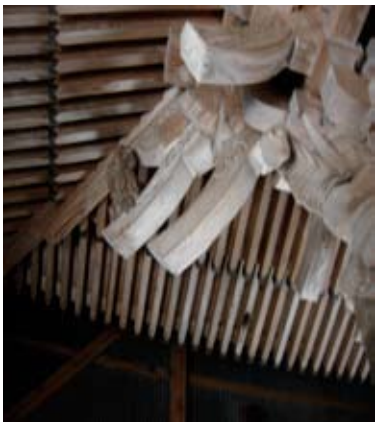
大興寺「土佛観世音堂」調査報告　南側断面図



大興寺「土佛観世音堂」 写真



彫刻　獅子・牡丹



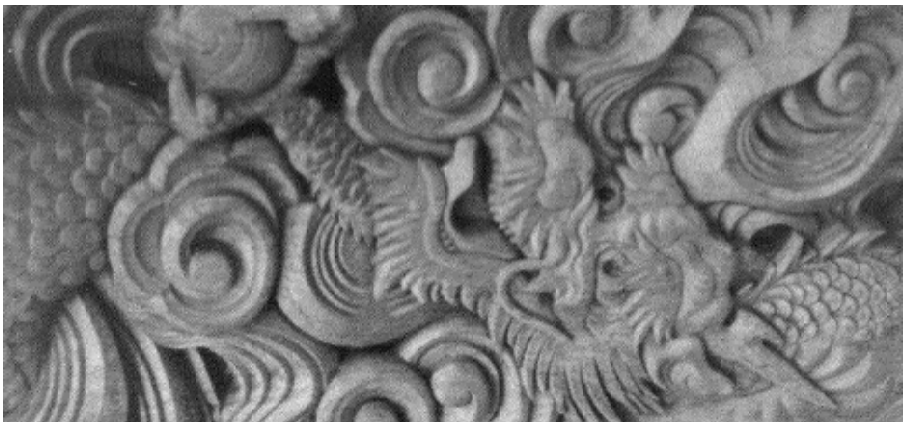
尾垂木と隅鬼・力神４隅

彫　刻　牡　丹

木　　鼻　　獅　子

彫　刻　獅　子

木　　鼻　　象



彫　刻　昇　龍

木　鼻　ワシ頭

外　観　鞘堂外部

外　観　鞘堂内部

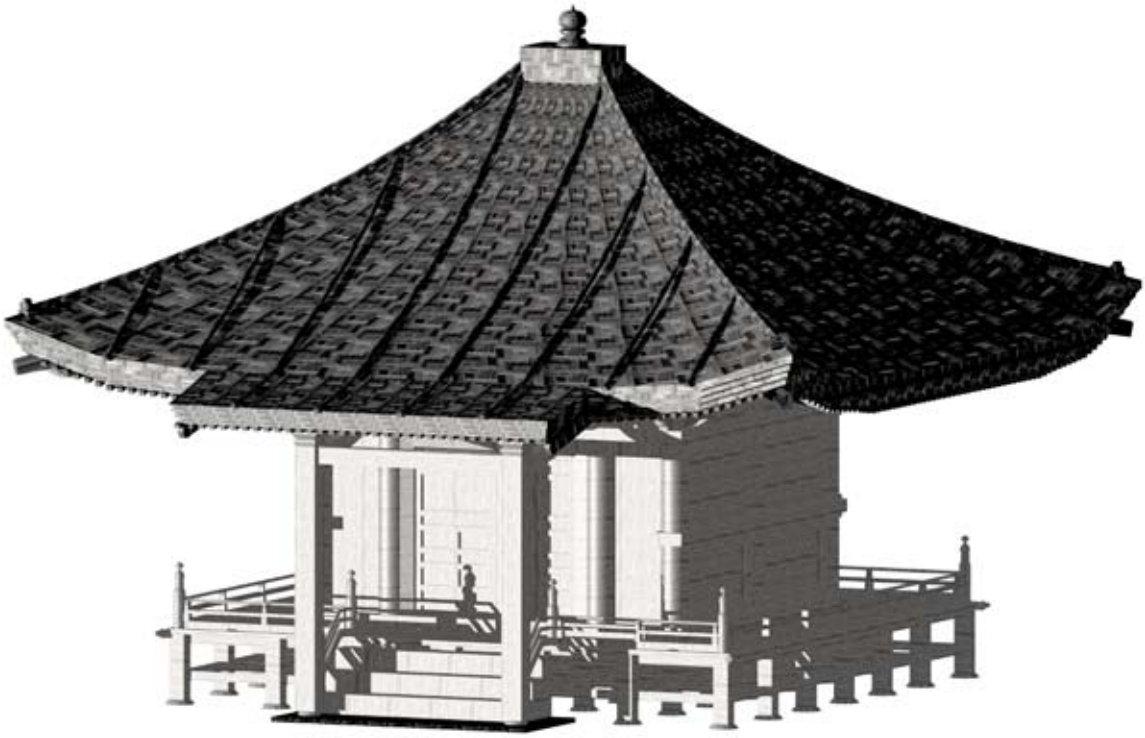
正面　唐戸彫刻左

唐戸彫刻唐右

虹梁と出組３手先　左

飛檐垂木と支輪・組詰の４斗　右

○ 図面より CG による 3D パース作成 CG3D モデル　南面正面右 45°



CG3D モデル　西側左 45°

堂　内

斗 栱

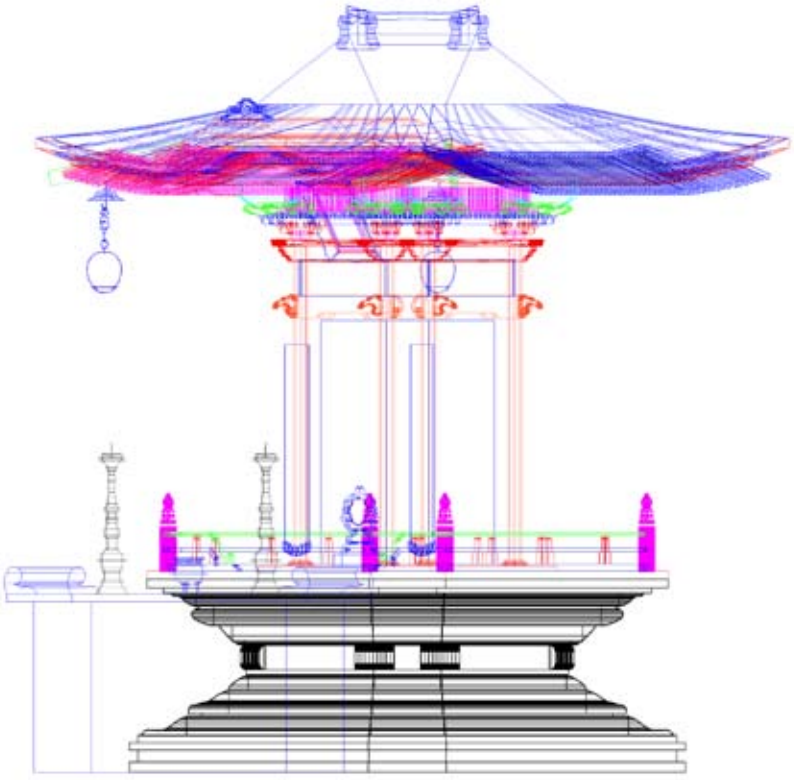
蟇股と支輪

脇障子（昇龍・降龍）

向拝柱 4 面彫刻 1 対

向拝柱彫刻十六羅漢 4 面対

大興寺「土佛観世音堂」 側面立体フレーム図



内陣　須弥壇　側面立体図